



詠歌大板

特別  
イ 4  
3163  
63





貴  
14  
3163  
63





詠哥大概

奇りよむ大概と云へ也詠吟と云ふと承承

りふと也詠ハ承承と云ふと承承と云ふと詠と云也

大概と云ふ事と可分付書櫃井官も承承といふ

所尋ゆふ事と云ふ事ハ世道との夏也未代ハ

是ら定家等のゆふ事ハ櫃井守道如親も奇し大

概と書く事進くと云ふ事ハ道徳に事と云ふ事

世大概くと云ふ事ハ新々にある事と云ふ事



んがハ

情以新為先

古人のいひあるをいひてはさういふより  
いひおのれ新とてし神代も新といふを  
あいつめを新といひて思ひ同しを詠するらる  
新といふより新といふは大概也

詞以舊可用

中代よりみまにわらう詞あり中代ハ  
詞のいふやうにわらう詞あり上代の詞より  
うはさく大やあらはしきもなすも世にあらはし

車とならよ火があらはしきなり

詞不可之三代集

三代集ハ古今後撰拾遺二の葉

三代集ト有レヘキコ百字ノ色ク世詞有テ人の耳邊カ  
らん中い詞有レ故三代集と用レ也百字ハ古今  
入らぬた誤入らぬと三代集ニミヤミ金やかり詞  
のうらにとあるなりとてはさういふはさう  
詞ハ不用 拾遺ニ百字ハうらも此等とありさうて取  
りしぎらるゆへ百字とするはさう後撰ニ百字ハなと



いふを亦拾遺の時入らむと

新古今古今同可用之

新古今古今学後撰拾遺の奇入らてふと其古人を  
と可用 新古今當代の人其奇を詞を用ひたるは  
歌歌概時新古今は此詞にすは然らざるなり  
今に考ゆれば後撰拾遺何と相後して新古今は  
追いつて不共と近風解は沙汰有也世歌歌概  
の時令に三代集のとり制は未代より久しきなり

わづかむと連奇に新古今同用ゆ其奇の新古今  
此者近奇にりるべきと定了也

風解可例能先達之香歌

不論古今者近見其  
歌可例其解

先達ノりりいくもる風解に想へて人今人  
不撰〜風解にりりい〜と〜風解に  
香歌内今人其奇の風解をいりり〜まは用ひよ  
とかり

近代之人亦新出之詞



近代のくまがたなるものゝあはれ雨の夕暮といひて  
人は物ともあしむるやと制筆也世後制筆は詞と  
為家御いふはもつと世所と思ふはもつと則詠奇  
一解といふは家御は書い世歌とかせんや  
右今世前にいひてをとおしん中にもあはれ世後制筆  
け奇とそりて

家御

ちるもはつとあはれ世所のあはれ世後制筆は詞と  
於是人たはつとあはれ世所のあはれ世後制筆は詞と

け奇とそりて 家御

新古今

あはれはつとあはれ世所のあはれ世後制筆は詞と  
凡そそつとあはれ世所のあはれ世後制筆は詞と  
け奇とそりて 新古今

さうをさつとあはれ世所のあはれ世後制筆は詞と  
詞は舊世といふ情と新しき世人のあはれ世  
あはれ世所のあはれ世後制筆は詞と  
さうをさつとあはれ世所のあはれ世後制筆は詞と



1 此の如くは、  
此の如くは、  
此の如くは、

1 此の如くは、  
此の如くは、  
此の如くは、

1 此の如くは、  
此の如くは、  
此の如くは、

1 此の如くは、  
此の如くは、  
此の如くは、

此の如くは、  
此の如くは、  
此の如くは、

1 此の如くは、  
此の如くは、  
此の如くは、

1 此の如くは、  
此の如くは、  
此の如くは、

1 此の如くは、  
此の如くは、  
此の如くは、

1 此の如くは、  
此の如くは、  
此の如くは、

1 此の如くは、  
此の如くは、  
此の如くは、

1 此の如くは、  
此の如くは、  
此の如くは、

1 此の如くは、  
此の如くは、  
此の如くは、



於古人多以其同調詠之已為流例

拾遺三流例

トヨムシ

古人の同調とて大方同く是なりとて上代の  
恒例の流例に恒例の也昔は

山をこころとてかくすはまたもあらはるる

山をこころとてかくすはまたもあらはるる

大忌はこころの山は常りある御言のり

古今喜ふ心は古の中山常りある御言のり

はちよは小節の心はこころのり

はちよは小節の心はこころのり

はちよは小節の心はこころのり

末代は古のり古人の細とて新し

末代の風解

但取古歌詠新する五句中及三句者頗る各無琢氣

百一三百奇と芳やえりか中頃より印の徳成郷

門人より始るる古人に相似多る



りどざりたるも定家家隆と云ふり  
其時帝れとやと云ふせしもの基傳傳成る所  
と云ふものかし定家郷より初と二条家一派は跡  
奇大概より起る取古歌の新奇と云ふる定家  
より定むし五句は由之句を合する但しそ  
るりゆと二句はと云ふ字免之と云ふ其字方  
よりて業と云ふことわづらふ中一と云ふこと  
く我なと云ふことわづらふことわづらふこと

かふりしと云ふことわづらふことわづらふこと  
月ゆかりに大始りしゆと云ふことわづらふこと  
そ上存せしものゆと云ふことわづらふこと  
之句はと云ふことわづらふことわづらふこと  
白字はと云ふことわづらふことわづらふこと  
續古今系隆

初所はと云ふことわづらふことわづらふこと  
と云ふことわづらふことわづらふこと



さうしてうらみとちかみとありぬる人々  
とくも是れ非なるものありぬる人々  
わらふ

以同交 詠る歌 詞 皮 無念 類  
以月 詠日

古一人のなほしるを詠ふと流例とあるを  
古今の古歌の心詠と詠ふに無念の心ありて  
とまの心ありと其まをひらいて  
無念の心ありと大なる古歌と新交と

詠ふは古人の心を詠ふは月を詠ふは  
いはかか心ありといふは古人の心を詠ふは  
其ありぬるといふは詠ふは

以中 歌 詠 悪 雑

よしが古歌と新交と詠ふは例に  
悪雑と四季に  
本交と新交と詠ふは例に  
其ありぬるといふは詠ふは



古今

おりしつらぬわたりぬきし錦もやうけしをよめ

高橋を術むかふをそらて

のりしつらぬわたりぬきし錦もやうけしをよめ

此舟の難の舟と西をこころぬかふに衣の針を

拾ふしつらぬわたりぬきし錦もやうけしをよめ

そらぬしつらぬわたりぬきし錦もやうけしをよめ

古今  
ぬきしつらぬわたりぬきし錦もやうけしをよめ

ぬきしつらぬわたりぬきし錦もやうけしをよめ

よの舟とそらぬしつらぬわたりぬきし錦もやうけしをよめ

下向うまふたるこころが無念こそ古舟とそらぬし

はねのしつらぬ

是川は山をぬき みるは昔の山 久き月の様

高きつらぬわたりぬきし錦もやうけしをよめ

是川は山をぬき みるは昔の山 久き月の様

よの舟とそらぬしつらぬわたりぬきし錦もやうけしをよめ

久き月の様をぬき みるは昔の山 久き月の様



朝とつるか日はあけぬをらやとてしるはあはれ  
夏草のまわりはうらふ玉汗は道の人のあはれ  
是處の山と云枕詞の思ふに山を渡つてあはれ  
くは山いみじくも別了ある思ふにみづかき山  
と云ふ方の天のふし時を五月の鳥かき鳥かき  
さ日やばあはれは是等の本歌をうたへては詩の  
まゆく字は心こむやとよむ常はまことよむまな  
うらてを難いあはれ

年が内りまきまきり 月やうらぬ春はじ

こころのふた風 ぶちくとつたはじ

うららの歌一人くは面白くしてうらてまなこ  
を山をふくまをた風情のうらまはし

朝古今此の時不世歌の詞多くとまを定ぬつ  
高木林をし 里のあまの月のあまの情をたあま  
あまの夜うら歌をうらまをたあまの古入  
はあまの不用な世歌入を解はうらまのこま



うまきとらそびなをこりしこころやれは  
月やゆめうらやみ文字に似てて物哀極まりし  
一句とてさうといつても不苦うらやみといふこと  
概らうに和文字に似てておぼくといふことと  
**常**観念古方之**常**字可憐心は**可**と**観**る古方伊勢也  
語

うまきとらそびなをこりしこころやれは  
月やゆめうらやみ文字に似てて物哀極まりし  
一句とてさうといつても不苦うらやみといふこと  
概らうに和文字に似てておぼくといふことと

うまきとらそびなをこりしこころやれは  
月やゆめうらやみ文字に似てて物哀極まりし  
一句とてさうといつても不苦うらやみといふこと  
概らうに和文字に似てておぼくといふことと

**可**と**観**る古方伊勢物哀後撰拾遺

代々の撰集のあはれも其中ふと観るるは  
こころんくハ伊勢物語 伊勢物語は古今の  
とあるはとも古今ハ古今ハ古今ハ古今ハ  
みらうこよすは伊勢物語は古今後撰拾遺  
之代集のあはれも



二十六人集之内

新古今之古人の奇は古今集内より撰りて  
新古今古人の奇は古今集内より撰りて  
人丸赤人家持多し  
入るるが新古今も入るるが新古今も  
忠孝といふ人丸は赤人丸の母之は躬恒といふ  
忠孝といふ人丸は赤人丸の母之は躬恒といふ  
忠孝といふ人丸は赤人丸の母之は躬恒といふ  
忠孝といふ人丸は赤人丸の母之は躬恒といふ  
忠孝といふ人丸は赤人丸の母之は躬恒といふ  
忠孝といふ人丸は赤人丸の母之は躬恒といふ  
忠孝といふ人丸は赤人丸の母之は躬恒といふ  
忠孝といふ人丸は赤人丸の母之は躬恒といふ

古奇の字を認めせしむるは古奇の字を認めせしむるは  
古奇の字を認めせしむるは古奇の字を認めせしむるは  
古奇の字を認めせしむるは古奇の字を認めせしむるは  
古奇の字を認めせしむるは古奇の字を認めせしむるは  
古奇の字を認めせしむるは古奇の字を認めせしむるは

随非和奇之先達時節之奇氣世るる一表

白氏文集の白氏天の詩集の今に世るる一表  
今に世るる白氏文集の白氏長を集りて  
時分り白氏文集の一二ノ性の間へ  
長恨奇りたりし不学でいふれお学が  
てハナリて書きたるは好むるの内へ



和方之集(只以舊章の所)

白布夫の詩集、和方の公通く、その書に  
和方と合對するを、白布夫のせい、その人より  
宗朝といふ、て、東坡、當朝の、新、及、今、其、年、よ  
ら、ら、と、白、氏、文、集、に、夫、今、其、時、に、ら、ら、と、其、り  
和方、其、集、に、只、以、舊、章、の、所、に、  
和方、其、集、に、微、好、し、て、其、よ、ら、ら、と、其、り  
其、の、邊、に、あ、ら、う、ら、ら、と、其、り、  
云、其、ら、ら、と、其、り、只、以、舊、章、の、所、に、

深心古風習詞之述者誰人可識之哉

人、其、人、其、之、躬、恒、伊、智、少、所、以、上、之、奇、  
之、不、古、其、之、奇、と、其、ら、ら、と、其、り、  
詞、と、其、其、ら、ら、と、其、り、之、は、其、其、ら、ら、と、其、り、  
此、ら、ら、と、其、り、之、は、其、其、ら、ら、と、其、り、  
奇、大、概、ら、ら、と、其、り、之、は、其、其、ら、ら、と、其、り、  
大、概、の、奇、と、其、其、ら、ら、と、其、り、  
其、其、ら、ら、と、其、り、之、は、其、其、ら、ら、と、其、り、  
伊、智、少、所、以、上、之、奇、



是書之於世也久矣其所以為世之所重者  
とあり左様之の深く詞と意と其の相違を  
余の道と相違しん中にもたつてはるしと  
すべし是より余が大目者として論評大  
有の上も好ましく思はるる事なり

右百花菴所印諸流之正統也在可珍  
重者也幣不許外見可被秘密  
者也校合如合符節仍向真書加之  
耳

百花菴所印

春竹菴校合

寶曆五乙亥年初冬上院







賞瓶第一のときも春まとい日暮の山とていふ  
あして去年小かり稲長あつくもゆふと紙の  
みでいふは山とていふまにまをなして今然の  
ハの字小毎をなして此所又今春は巻紙の家  
二十代集の内の中をいふ

君ら多し春は野もあつくもふついで夜もあつくも  
仁和寺の御子あかくあかりり時人のあまのい

りり時の御あまのいりに和帝は光孝天皇はるく御子  
あつくもあつくもあつくもあつくもあつくもあつくも  
位はあつくもあつくもあつくもあつくもあつくもあつくも  
又ハあつくもあつくもあつくもあつくもあつくもあつくも  
春ハあつくもあつくもあつくもあつくもあつくもあつくも  
まこ一首のあつくもあつくもあつくもあつくもあつくもあつくも  
あつくもあつくもあつくもあつくもあつくもあつくもあつくも  
あつくもあつくもあつくもあつくもあつくもあつくもあつくも







梅のつぼみはあけみえぬ久すはつらつとあけぬと

梅のつぼみはあけみえぬ久すはつらつとあけぬと

梅のつぼみはあけみえぬ久すはつらつとあけぬと

梅のつぼみはあけみえぬ久すはつらつとあけぬと

梅のつぼみはあけみえぬ久すはつらつとあけぬと

梅のつぼみはあけみえぬ久すはつらつとあけぬと

梅のつぼみはあけみえぬ久すはつらつとあけぬと

梅のつぼみはあけみえぬ久すはつらつとあけぬと

久すはつらつとあけぬと

梅のつぼみはあけみえぬ久すはつらつとあけぬと

梅のつぼみはあけみえぬ久すはつらつとあけぬと

梅のつぼみはあけみえぬ久すはつらつとあけぬと

梅のつぼみはあけみえぬ久すはつらつとあけぬと

梅のつぼみはあけみえぬ久すはつらつとあけぬと

梅のつぼみはあけみえぬ久すはつらつとあけぬと



初版のころ一冊目から中絶して久しく二年と  
経過後再び一冊目から中絶して久しく二年と  
経過後再び一冊目から中絶して久しく二年と  
経過後再び一冊目から中絶して久しく二年と  
経過後再び一冊目から中絶して久しく二年と  
経過後再び一冊目から中絶して久しく二年と  
経過後再び一冊目から中絶して久しく二年と  
経過後再び一冊目から中絶して久しく二年と  
経過後再び一冊目から中絶して久しく二年と  
経過後再び一冊目から中絶して久しく二年と

つらめ内梅の部もあつた  
つらめ内梅の部もあつた  
つらめ内梅の部もあつた  
つらめ内梅の部もあつた  
つらめ内梅の部もあつた  
つらめ内梅の部もあつた  
つらめ内梅の部もあつた  
つらめ内梅の部もあつた  
つらめ内梅の部もあつた  
つらめ内梅の部もあつた

根をさす  
長さを向う脚をもとめり  
をうまへ一冊目から中絶して久しく二年と  
あつた























栞の時帝をもて春は暖の季節なりやひくくを結  
道新の風流り始る風流りたることしきりし  
くむかうしき

久方の光を写し春は百年と云ふも、はなれりし  
久方の天のまろく初くと定家はのち作らるるあまの  
陽春のうらひの日の芝も春の人の心とすまはれり  
あーさうらなれば時を春のうらひにむと書きかたは  
まふむと花を春のうらひにむと書きかたは

あまのうらひにむと書きかたは  
かろニ条家にむと書きかたは  
かろをばあまのうらひにむと書きかたは  
つゆんがはむと書きかたは  
あまのうらひにむと書きかたは  
まふむと書きかたは  
まふむと書きかたは  
まふむと書きかたは































ありしをいへばその先任やとありふもなき

● 小説大やうな一冊書いおけのふとありのうらあのは  
るのうらあをうらあ一冊何とてやれ本かうとあふに  
友もあつたあをうらあ一冊のたにあふらうれ一冊  
思ふとあふらうれ一冊とあふらうれ一冊とあふらう  
中とあふらうれのあふらうれ一冊とあふらうれ一冊  
後の一冊とあふらうれ一冊とあふらうれ一冊とあふ  
あふらうれのあふらうれ一冊とあふらうれ一冊とあ  
とあふらうれ一冊のあふらうれ一冊とあふらうれ一冊  
らうれ一冊とあふらうれ一冊のあふらうれ一冊とあ  
ふらうれ一冊とあふらうれ一冊とあふらうれ一冊とあ  
ふらうれ一冊とあふらうれ一冊とあふらうれ一冊とあ

あふらうれ一冊とあふらうれ一冊とあふらうれ一冊とあ  
ふらうれ一冊とあふらうれ一冊とあふらうれ一冊とあ  
あふらうれ一冊とあふらうれ一冊とあふらうれ一冊とあ  
あふらうれ一冊とあふらうれ一冊とあふらうれ一冊とあ

わくしいうまもあはるのうらあをうらあ一冊とあ

このうらあの一冊とあふらうれ一冊とあふらうれ一冊とあ  
あふらうれ一冊とあふらうれ一冊とあふらうれ一冊とあ  
一冊とあふらうれ一冊とあふらうれ一冊とあふらうれ一冊  
あふらうれ一冊とあふらうれ一冊とあふらうれ一冊とあ  
あふらうれ一冊とあふらうれ一冊とあふらうれ一冊とあ



の宮城野にてとやひやうとてあつたをいふにうらむるを  
時希に字をて感しうらむ

胎記の初先の子を母の胎の上は育ち死しはうらむるをいふ  
しとて者なればしと世にうつるものも胎記のしとて  
それこれ心みやうの一首一代の持つてあつた  
位名もいふの胎記は育ちてあつたよりのあつた  
あつたしとてや上のあつたしとてあつたしと  
いふしとてあつたしとてあつたしとてあつたしと  
いふしとてあつたしとてあつたしとてあつたしと  
あつたしとてあつたしとてあつたしとてあつたしと  
あつたしとてあつたしとてあつたしとてあつたしと

とよむらうとてあつたしとてあつたしとてあつたしと  
あつたしとてあつたしとてあつたしとてあつたしと  
あつたしとてあつたしとてあつたしとてあつたしと  
あつたしとてあつたしとてあつたしとてあつたしと  
あつたしとてあつたしとてあつたしとてあつたしと

月とてあつたしとてあつたしとてあつたしと

あつたしとてあつたしとてあつたしとてあつたしと  
あつたしとてあつたしとてあつたしとてあつたしと  
あつたしとてあつたしとてあつたしとてあつたしと  
あつたしとてあつたしとてあつたしとてあつたしと  
あつたしとてあつたしとてあつたしとてあつたしと







海に舟を乗し時節は春の如く一人閑寂海をゆく  
其を思ふ閑寂の如くの庭に舟を乗し舟を乗るの如く  
舟に舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し  
舟の舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し

● 舟説 舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し  
舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し  
舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し  
舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し  
舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し

の心と舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し  
舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し  
舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し  
舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し  
舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し

わが舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し  
舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し  
舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し  
舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し  
舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し舟を乗し







うけつるがなりんねは下界の宮殿より上りて亭へく  
開けりてふはよれおはれしゆのこころうへ天上の月宮  
殿の始めをとりしやうてよこしなるはくしと  
福の月宮殿より心をやうと福多き感情を述べ断  
りしゆし福のこころのまじりあはれはくしと海へ交  
りしと宮殿構図の相方に宮殿より上りて日宮殿へ  
ゆくはけりしとあつて宮殿より上りて日宮殿へ  
ゆくはとけりしとあつていし

● 胎説を詠ふ等しきも初より詠意をなすやうやく  
きしは詠の及格的中心は叙述多しなり  
初は文字よりあし詠意をなすはつたものと文字は  
たて下は句の月の初のとこの文字は極品也はあつては  
これよりあし詠意を授けりしゆはよれしゆの  
しゆのこころのまじりあはれはくしと海へ交



好乃家々神々いふは長き水乃流るる家月いふ

いふはつらつらいふは長き水乃流るる家月いふ

長き水乃流るる家月いふ

いふはつらつらいふは長き水乃流るる家月いふ

いふはつらつらいふは長き水乃流るる家月いふ

いふはつらつらいふは長き水乃流るる家月いふ

いふはつらつらいふは長き水乃流るる家月いふ

いふはつらつら

終夜

終夜母を抱き報せし母の面をよみしは秋の感懐不憚りて  
そらよは海の底をほらよ母のうらなをいふてよも由りてよ  
中へ透りしは母の落涙をよ相いふるなりしは少き母の涙  
いふはつらつらいふは長き水乃流るる家月いふ  
我の嘆息也



第...の...  
...  
...

物...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

此後

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...







































尾山とくふとくろく只月をし五千の海  
留る舟と停泊し 右八代島

三二

右八代島  
船積り入るる舟

かろく之河の月を月影とてとらふ舟はかろくありの風  
玄古師舟の概好云



























石とあるのは藤原家とて一板をりたる。さかやうと云ふ  
言方孫哥と藤城之為と布るは、さかやうと云ふ言方  
御書乃以より連なる心をさかやうと云ふ言方とて一  
一に違ふとて一と一板をりたる。さかやうと云ふ言方  
言し叶はぬ一板をりたる。さかやうと云ふ言方とて一  
言方孫哥と藤城之為と布るは、さかやうと云ふ言方  
御書乃以より連なる心をさかやうと云ふ言方とて一  
一に違ふとて一と一板をりたる。さかやうと云ふ言方











せしめし御別をうへていふにうへに御言に是はうへに  
いふをうへにうへに人し 右 協賛を御言  
はえお程か委しうへに再教よ及なれまこと御言  
尋ねの本まきまの御言

いふとも二巻の下にうへにうへにうへにうへに  
全巻詞書に小式の内ゆせこのら上東門院より  
いふりり家まのやあはれいふりりいふりり小式の  
内ゆとちがられうへにうへにうへに 和系或部より  
師範は五文字小式より名も果るうへにうへにうへに  
下に御言しうへに 言方曰うへにうへにうへに  
小式アう世うへにうへにうへにうへにうへに  
て今一入世しうへにうへにうへにうへに

いふの御言  
御言はもあ程かうへにうへに再教よ及なれまこと御言  
尋ねの本まきまの御言



かきりわしはびけりきすその夜衣をそめきよめにかきり

是ハ父の表をゆきそのかき 父乃服一年と服を  
今限もふりし表乃果え服ぬきてもた潤果

かきり

るハハはは

清きは算も身杖もゆきよる 至孝の心かきり  
人乃の束ときよめかきり 孝の心乃の源はは  
侍をたかきりハハはは 常の束ははハハは

おのいばるれははの夕燈むせりしきりしきり

玄旨極まぬかきり 思ひおふれきり ねとよ中をさ  
り ちりいつふきりハハはは 名ははははははは  
高きあはははははははははははははははははは  
はははははははははははははははははははははは



形見あはれとつらうりぬきし衣つうく河つさき女尊  
御製し 宗祇自濟哥語云む世にいとつらうり  
ふあはれとちも形見とつらひ妹一さゆこ 宗祇御製也  
言方い善法乃御母の道指と初りてと云こ 宗祇法華初  
こせまひとと云こ 又夜乃御昔傷こ 命后に通光乃  
妹兼明門流云こ 各決定乃没可 口訣云  
右ハ代集抄

法云右流の弁小名侍所 一とくまのり長傳の舞よ  
つれづれに御製書集抄の結業也

あま人乃いよのやまにんぬり人乃あまのりりこい

又好宮より海をまのりあまのり御製書集抄の結業也  
人乃朝やまのあまのりあまのりあまのりあまのりあまのり  
のあまのりあまのりあまのりあまのりあまのりあまのり  
くあまのりあまのりあまのりあまのりあまのりあまのり  
巫山乃神女楚襄王の妾と申すこと別をけり  
朝のあまのりあまのりあまのりあまのりあまのりあまのり  
あまのりあまのりあまのりあまのりあまのりあまのり











此きいぬきもさうりていふ向ふにふれりていふ神をいふ  
 けきいぬきもさうりていふ向ふにふれりていふ神をいふ  
 日向山乃其家の端をいふやいふいふいふいふいふ  
 下流に流さるといふいふいふいふいふいふいふいふ  
 すうすうすうすうすうすうすうすうすうすうすうすう  
 皇川の山をいふすうすうすうすうすうすうすうすうすう  
 此は果 右八代守  
 此鏡百人といふいふいふいふいふいふいふいふいふ

新得くす中たてに若うりてすうすうすうすうすうすうすう

玄名部を大願わすすうすうすうすうすうすうすうすうすう  
 衣あつたふとすうすうすうすうすうすうすうすうすうすう  
 下といふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
 派たれとすうすうすうすうすうすうすうすうすうすう  
 リノ 幸ヌスロコ 旅宿乃新すうすうすうすうすうすう  
 右八代守

旅をすうすうすうすうすうすうすうすうすうすうすうすう  
 付ゆらぶすうすうすうすうすうすうすうすうすうすうすう  
 かの地をすうすうすうすうすうすうすうすうすうすうすう  
 といふすうすうすうすうすうすうすうすうすうすうすう  
 旅宿のすうすうすうすうすうすうすうすうすうすうすう











Handwritten text in a cursive script, likely a list or account, starting with a red line.

Handwritten text in a cursive script, continuing the list or account.

Handwritten text in a cursive script, continuing the list or account.







ありはく下味あり 室もたは 是もたぬいひのや

室八郎の烟乃本流と流れ、新、何れも若く

右師流

流之船渡の舟も待た

夕ぐれと云ふものもいひのまじりては、まらぬ人か、いふ

とらば、まらぬ人か、いふものも、いふものも、いふものも

とて、歌は、まらぬ人か、いふものも、いふものも、いふものも

旗の、日入の、まらぬ人か、いふものも、いふものも、いふものも

とらば、まらぬ人か、いふものも、いふものも、いふものも

とらば、まらぬ人か、いふものも、いふものも、いふものも

とらば、まらぬ人か、いふものも、いふものも、いふものも

とらば、まらぬ人か、いふものも、いふものも、いふものも

とらば、まらぬ人か、いふものも、いふものも、いふものも

とらば、まらぬ人か、いふものも、いふものも、いふものも

とらば、まらぬ人か、いふものも、いふものも、いふものも











あはれなるに  
定家御遺代  
何れも縁あり  
安んじし十首の内  
所親百人

源をたる之  
所設序言  
おはれなるに  
七  
あはれなるに  
男  
安んじし十首の内  
所親百人



Handwritten text in a cursive script, likely a list or index of names and titles. The text is written in a dark ink on aged paper.

Handwritten text in a cursive script, continuing the list or index. The text is written in a dark ink on aged paper.

Handwritten text in a cursive script, continuing the list or index. The text is written in a dark ink on aged paper.







あり明のほましくしし 別を懐くううさ地にか

人乃はまふらよと懐くううさ地にか

沿とふ心し 取照流女乃とくうり 神のぬるく

に有明志月 明くううりはまふらよと懐くううさ地にか

より懐くうくかほくううり 口訣定家

はまふらよと懐くううさ地にか

と及すえしと懐くううさ地にか

とらうと懐くううさ地にか

一様中流後を懐くううさ地にか

い浅集乃中より 句白ま哥に右方いり

しう有明乃ほましくしし 乃をむく

とこい中より 記録する

定家つぎに 集乃有る

階鏡百人一首抄



若れ門せり 埋れあつたは いかせんうらうらひをりせん  
ゆづりハいゝせんそと 我ハ遠くは初るそと 世のけ  
まゝを思ひは ちせん方らあま 休歌さるる 句  
埋れハあとも 出ても年久し へうしをいへるまに  
松後りとも ちせん後ら乃あつたハいゝませんそと 我ハあめりん  
ゆづりハいゝせんそと 直ハ是絶くまら 密物  
空のけつ 古今集 赤井十香の 其ハく いかんか  
海云 須賀 須賀 其の 人々 須賀 須賀 須賀 須賀  
須賀 須賀 須賀 須賀 須賀 須賀 須賀 須賀 須賀 須賀















Handwritten text in Arabic script, starting with a large initial letter. The text appears to be a religious or philosophical passage.

Handwritten text in Arabic script, continuing the passage from the previous line.

Handwritten text in Arabic script, continuing the passage.

Handwritten text in Arabic script, continuing the passage.

Handwritten text in Arabic script, continuing the passage.

Handwritten text in Arabic script, continuing the passage.

Small handwritten text or signature.

Handwritten text in Arabic script, continuing the passage.

Handwritten text in Arabic script, continuing the passage.

Handwritten text in Arabic script, continuing the passage.

Handwritten text in Arabic script, continuing the passage.



Handwritten text in a cursive script, likely a list or account. The text is written in a dark ink on aged paper. It begins with a vertical line on the left side, followed by several lines of text. The script is dense and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a dark ink on aged paper. It begins with a vertical line on the left side, followed by several lines of text. The script is dense and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a dark ink on aged paper. It begins with a vertical line on the left side, followed by several lines of text. The script is dense and difficult to decipher without a key.











世本乃哥大畧之抄者先附而記卷卷山  
藁長先御說也當乃之大事一乃之  
能撰也深秘之勢之他見不有之也

于時寶曆八年春三月下旬

百祀卷乃梳

春秋卷滿光

細谷孝主人









۱۱

۱۱









